

山村と都市の連帯

— 水と緑を守り育む・岐阜シンポジウム '88から —

はじめに

本稿は、1988年9月10日に開催した「水と緑を守り育む・岐阜シンポジウム '88」の記録である。したがって執筆者は、シンポジウムの講師陣と企画を進めた「森林文化を語る会」の会員により構成されている。

シンポジウムの講師陣と各々が担当したテーマは、〔付シンポジウム次第〕に掲げたとおりであるが、福岡克也氏と北澤秋司氏を除き、全員「森林文化を語る会」の会員である。この会は、東海地方に在住もしくは勤務する林学研究者有志で作られているもので、筒井迪夫氏を代表として会合をもっている。一言で表わせば、“楽しい放談会”であり、今回のような形でのシンポジウム主催などの試みは、もちろん初めての経験であった。

シンポジウム開催については、幹事が集まって企画を練り上げ、実行に移したが、密接な協力関係に支えられて、理想的な形で推進できた、と自画自賛している。折しも長良川畔では「中部未来博」が開かれており、この地で「水と緑」を基軸にする「山村と都市の連帯」を唱い上げ、我々なりの「未来社会への展望」を行う意義は、きわめて大きいと考えた次第である。

「水と緑」—人間の生存にとって欠くことのできないもの。それをどのような形で守り、育てていくか。我々の社会、我々の時代に課せられた仕事として、それを問い続けねばならないであろう。シンポジウムが、そのひとつの表れとしての意味をもつことを、我々は願っている。

世界に誇る清流長良川が、上流・山村と下流・都市とのしっかりした連帯の絆のもとで、いつまでも豊かな「水と緑」の象徴であり続けることを願ってやまない。

(シンポジウム事務局代表・岐阜大学農学部 林 進)